

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 34 号

平成 17 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

新渡戸稲造「一日一言」より（1）

新渡戸稲造（文久 2 年（1862） 昭和 8 年（1933））

札幌農学校 2 期生として、内村鑑三と同期。一高校長を務めたわが国の代表的教育者。一高校長時代の教え子に極めて大きな感化を及ぼし、その中から、前田多門、南原繁、矢内原忠雄など、戦後民主主義の確立のために活躍した多くの人物が排出した。大正時代、国際連盟事務次長を務め、国際人としても有名。「一日一言」「修養」「武士道」など、多くのわかりやすい人生教訓の本を書いた。

文久 2 年（1862） 8 月 3 日盛岡市に生まれる。

明治 10 年 札幌農学校に第 2 期生として入学。

明治 17～24 年 アメリカ、ドイツに留学。

明治 24 年 メリー・エルキントン嬢と結婚。札幌農学校教授。

明治 32 年 病氣療養のため滞在中のアメリカで、「武士道」執筆。

明治 34～36 年 台湾総督府技師、課長、台湾糖務局長

明治 36 年 京都大学教授

明治 39 年～大正 2 年 第一高等学校校長（45～52 歳）

大正 2 年 東京帝国大学教授（植民政策）

大正 4 年 「一日一言」発行。

大正 7 年 東京女子大学長

大正9年～大正15年 国際連盟事務次長

昭和8年(1933) 10月15日、カナダ、ヴィクトリアで逝去。

1月1日

初めの一步は道の半(なかば)にあたる。何事も出ようが大切。
花は芽にあり、大人の心は三つ児に始まる。今年の事業は今日の心
に起こる。

ひととせを皆今日の心地して

のどかに世をも過ごしてしがな

1月2日

今年の秋は雨か嵐か予測はできぬが、この決心、この努力を持続し
たなら、1年ぐらいの旅路に越え得ぬ坂もあるまいし、渡れぬ河も
あるまい。世渡りは足の芸ではない、心の歩行(あゆみ)である。

一生は旅の山路と思ふべし

平地は少し峠沢山

1月3日

昨日結んだ紐（ひも）の、今日早や緩むを見れば、明日は解けはせぬかと案じられる。最明寺（北条）時頼も、

いくたびか思いさだめて変るらん

頼むまじきは我が心なり

と詠じて、決心と実行との難（かた）きを嘆じたが、結んだ紐は、その日その日に新に締め直せば固く締まってくる。

1月6日

位高きが故に傲慢（ごうまん）になったり、財多きが故に奢侈（しゃし）に流れたりするを思えば、やはり簡易生活するにしくはないと感じられる。位や金は幸福の要素ではない。かえって心配の種となる。

事足らぬ身をな恨みそ鴨の足の

短うてふぞ浮かむ瀬もあれ

1月8日

新たに志を立つる者は、必ず新しい故障や妨害に遭う。禁酒を実行する当初には、酒の香が志の妨害となる。新たに宗旨に帰依した者は、旧友の虐待を受く。自分の指図でできた新宅も、住み慣れるには間（ひま）が要る。

武士の取り伝えたる梓弓

引きては人のかへるものかは

1月10日

ありがたいと思う感念は、心の外にある品物ではない。苦しいことも、ありがたいと念ずれば、直ちにありがたくなる。いやなことも、うるさいことも、生も死も。感謝の念は鉄も鉛も黄金に化する力がある。

箸(はし)とらば主人や親の恩を知れ

わが一力で喰ふと思ふな

飢えて死ぬ人の多かる世の中に

箸とるたびに思ひ出だせよ

1月14日

すべて世の事は顕(あら)われぬところに力の源がある。船の走るのも底に備えてある汽鐘のおかげ。人の五臓も表には見えぬ。英雄の力も内助による事多い。目に立つ桜は春一時の栄え、地の下の根は冬来たりても死なぬ。

年毎に春を知りてや梅桜

木を割りて見よ花のありかを

1月15日

世に生まれ出でたる大々的的目的は、人のために尽くすにある。自己の名利のためではない。我が生まれ来た時より死に至るまで、わが周囲の人が少しなりともよくなれば、それで生まれた甲斐ありというもの。

君のため民のためぞと思はずば

雪もほたるも何かあつめん

なべて世の民の愁いの深い江に

身をつくしても救ひてしがな

1月16日

一年に幾度もなき今日の藪(やぶ)入り。主人も喜びてこの日を祝福すべく、雇われ人は一日の自由を善用し、面白く用うるこそよけれ。後日、悔ゆるごとき行なきよう望ましき事なり。父母、親戚、恩人などを見舞うは最も善用の法。

使ふ人使はるる人もろともに

力合はせてかまのふた開け

1月18日

大にもあれ小にもあれ、いやしくも事をなさんとすれば、どこからか反対を受けるは必然なり。あるいは馬鹿と罵(ののし)られ、あるいは狂人と呼ばれ、あるいは悪人と恐れられ、あるいは偽善者と嘸(あざけ)られる。これが試験で、及落を定むるものは忍耐である。

踏まれても根づよく忍べ道芝の

やがて花咲く春は来ぬべし

1月19日

求めざるにふと我が心を吹き通る一陣の風、真暗闇にどこの隙間(すきま)やらより入り来る一道の光明、四面楚歌の声の内に細々しく洩れ聞こゆる同情の声は何。そのよって起こる所こそ明らかならざれ、その達する所は確かに我なりと知らば、人生何か失望すべき。

1月20日

世話をすれば親切ぶる、読書をすれば学者ぶる、説を述べれば利口ぶる、まじめになれば君子ぶる、と他人(ひと)の言葉のみ恐れていては、電車で席も譲られず、書店で本も買われぬ訳。心のなせと命ずる事をなさざるこそぶるの極、善事を行うに遠慮は無用。

かたくなと笑へば笑へ真直(まっす)くな
誠の道を行けるこの身を

1月28日

人のする事なす事に、我々の気に入らぬことは多い。さればとて人の悪いのではない。恐らく気に入らぬと思う我々の方が悪い場合が多かるう。人を容れる度量を欠く気こそ小さい気であれば、この小気、小胆こそ笑うべきではなかるうか。

善し悪しは人にはあらで我にあり
人の悪しきは我が悪しきなり
人の我に辛きも人をとがめずて
我が身のわるき影とこそ知れ

1月30日

家庭の睦まじきは他人が見ても心地よく、天下泰平の基も夫婦親子の親しみに始まる。家斉(ととの)うて国治まる。世間で羨(うら)まるほど夫婦仲よきは、御国に尽くす忠義の一法。

楽しみは春の桜に秋の月
家内仲よく三度喰ふ飯
世を渡る道はと問はば兎に角に
夫婦睦みて親子親しめ